

どんぐり

寺田寅彦

青空文庫

もう何年前になるか思い出せぬが日は覚えている。暮れもおし詰まった二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷^{したやまりしてん}摩利支天の縁日へ出かけた。十時過ぎに帰って来て、袂^{たもと}からおみやげの金^{きん}鐙^{つば}と焼き栗^{ぐり}を出して余のノートを読んでいる机のすみへそつとのせて、便所へはいったがやがて出て来て青い顔をして机のそばへすわると同時に急に咳^{せき}をして血を吐いた。驚いたのは当人ばかりではない、その時余の顔に全く血のけがなくなつたのを見て、いっそう気を落としたとこれはあとで話した。

あくる日下女が葉取りから帰ると急に暇をくれと言い出した。このへんは物騒で、お使いに出るときつといやないたずらをされますので、どうも恐ろしくて不気味で勤まりませぬと妙な事を言う。しかし見るとおりの病人をかかえて今急におまえに帰られては途方にくれる。せめて代わりの人のあるまで辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、とにかく一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、その日はどうやら思い止まつたらしかつたが、翌日は国元の親が大病とかいうわけはどうとう帰ってしまう。掛け取りに來た車屋のばあさんに頼んで、なんでもよいからと桂^{けい}庵^{あん}から連れて来てもらったのが美代^{みよ}という女であつた。仕合わせとこれが氣立てのやさしい正直もので、もつとも少しぼんやりして

いて、たぬきは人に化けるものだというような事を信じていたが、とにかく忠実に病人の看護もし、しかられても腹も立てず、そして時にしくじりもやった。手水鉢ちようずばちを座敷のまゝ中で取り落として洪水こうずいを起こしたり、火燵こたつのお下がりを入れて寝て蒲団ふとんから畳まで径一尺ほどの焼け穴をこしらえた事もあった。それにもかかわらず余は今に至るまでこの美代に対する感謝の念は薄らぐ。

病人の容体はよいとも悪いともつかぬうちに年は容捨なく暮れてしまう。新年を迎える用意もしなければならぬが、何を買ってどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人のさしずを聞いてそれに自分の意見を交ぜて一日忙しそうに働いていた。大晦日おおみそかの夜の十二時過ぎ、障子のあんまりひどく破れているのに気がついて、外套がいとうの頭巾ずきんをひつかぶり、皿さつ一枚をさげて森川町もりかわちょうへ五厘の糊のりを買いに行ったりした。美代はこの夜三時過ぎまで結びごんにやくをこしらえていた。

世間はめでたいお正月になって、暖かい天気が続く。病人も少しずつよくなる。風のないう日は縁側ひなたの日向へ出て来て、紙の折り鶴づるをいくつとなくこしらえてみたり、秘蔵の人形の着物を縫うてやったり、曇った寒い日は床の中で「黒髪」をひくくらしいになった。そして時々心細い愚痴うそっぽい事を言つては余と美代を困らせる。妻はそのころもう身重になつ

ていたので、この五月には初産^{ういざん}という女の大難をひかえている。おまけに十九の大厄^{たいやく}だと言う。美代が宿入りの夜など、木枯らしの音にまじる隣室のさびしい寢息を聞きながら机の前にすわって、ランプを見つめたまま、長い息をすることもあった。妻は医者の中に合いの気休めをすっかり信じて、全く一時的な気管の出血であつたと思つていたらしい。そうでないと信じたくなかつたのであろう。それでもどこにか不安な念が潜んでいると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、なおらないときまつた事はないのでしょうかね」とこんな事をきいた事もある。またある時は「あなた、かくしているでしょう、きつとそうだ、あなたそうでしょう」とうるさく聞きながら、余の顔色を読もうとする、その祈るような氣づかわしげな目づかいを見るのが苦しいから「ばかな、そんな事はないと言つたらない」と邪慳^{じゃけん}な返事で打ち消してやる。それでも一時は満足する事ができたようであつた。

病氣は少しずつよい。二月の初めには風呂^{ふろ}にも入る、髪も結うようになった。車屋のばあさんなどは「もうスツカリ御全快だそうで」と、ひとりできめてしまつて、そつとふところから勘定書きを出して「どうもたいへんに、お早く御全快で」と言う。医者^{いしや}の所へ行つて聞くと、よいとも悪いとも言わず、「なにしろちようど御妊娠中ですからね、この五月がよほどお大事ですよ」と心細い事を言う。

それにもかかわらず少しずつよい。月の十何日、風のない暖かい日、医者への許可を得たから植物園へ連れて行ってやると言うたいへんに喜んだ。出かけるとなつて庭へおりと、髪があんまりひどいからちよつとなでつけるまで待つてちようだいと言う。ふところ手をして縁へ腰かけてさびしい小庭を見回す。去年の枯れ菊が引かれたままで、あわれに朽ちている、それに千代紙の切れか何かが引つ掛かつて風のないのに、寒そうにふるえている。手水鉢ちようずばちの向かいの梅の枝に二輪ばかり満開したのがある。近づいてよく見ると作り花がくつつけてあつた。おおかた病人のいたずらしい。茶の間の障子のガラス越しにのぞいて見ると、妻は鏡台の前へすわつて解かした髪を握つてぱらりと下げ、櫛くしをつかっている。ちよつとなでつけるのかと思つたら自分で新たに巻き直すと見える。よせばよいのに、早くしないかとせき立てておいて、座敷のほうへもどつて、横になつてけさ見た新聞をのぞく。早くしないかと大声で促す。そんなにせき立てると、なおできやしないわと言う。黙つて台所の横をまわつて門へ出て見た。往來の人がじろじろ見て通るからしかたなしに歩き出す。半町ばかりぶらぶら歩いて振り返つてもまだ出て来ぬから、また引つ返してもと来たとおりに台所の横から縁側へまわつてのぞいて見ると、妻が年がいもなく泣き伏しているのを美代がなだめている。あんまりだと言う。一人でどこへでもいらつしやい

と言う。まあともかくもと美代がすかしなだめて、やっと出かける事になる。実にいい天気だ。「人間の心が蒸発して霞になりそうな日だね」と言ったら、一間ばかりあとを雪駄を引きずりながら、大儀そうについて来た妻は、エ、と氣のない返事をして無理に笑顔をこしらえる。この時始めて氣がついたが、なるほど腹の帯の所が人並みよりだいぶ大きい。あるき方がよほど変だ。それでも当人は平氣でくつついて来る。美代と二人でよこせばよかつたと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはいつてまつすぐに広いたらたら坂を上つて左に折れる。穏やかな日光が広い園にいっぱいになって、花も緑もない地盤はさながら眠つたようである。温室の白塗りがキラキラするようでその前に二三人ふところ手をして窓から中をのぞく人影が見えるばかり、噴水も出ていぬ。睡蓮もまだつめたい泥の底に真夏の雲の影を待っている。温室の中からガタガタと下駄の音を立てて、田舎のばあさんたちが四五人、きつねにつままれたような顔をして出て来る。余らはこれと入れちがつてはいる。活力の満ちた、しめつぽい熱帯の空氣が鼻のあなから腦を襲う。椰子の木や琉球の芭蕉などが、今少し延びたら、この屋根をどうするつもりだろうといった事であるが、きょうもそう思う。ハワイという国には肺病が皆無だとどれかの言つた事を思い出す。妻は濃緑に朱の斑点のはいつた草の葉をいじっているから「オイよ

せ、毒かもしれない」と言ったら、あわてて放して、いやな顔をして指先を見つめてちよつとかいでみる。左右の回廊にはところどころ赤い花が咲いて、その中からのんきそうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか気分が悪くなったと言う。顔色はたいして悪くもない。急になま暖かい所へはいったためだろう。早く外へ出たほうがよい、おれはもう少し見て行くからと言ったら、ちよつとためらったが、おとなしく出て行つた。あかい花だけ見てすぐ出るつもりでいたら、人と人との間へはさまって、ちよつと出そこなつて、やつと出て見ると妻はそこにはいぬ。どこへ行つたかと思回すと、はるか向こうの東屋あずまやのベンチへ力なさそうにもたれたまま、こつちを見て笑っていた。

園の静けさは前に変わらぬ。日光の目に見えぬ力で地上のすべての活動をそつとおさえつけてあるように見える。気分はすっかりよくなつたと言うから、もうそろそろ帰ろうかと言うと、少し驚いたように余の顔を見つめていたが、せっかく来たから、もう少し、池のほうへでも行つてみましょうと言う。それもそうだとそつちへ向く。

崖がけをおりかかると下から大学生が二三人、黄色い声でアリストートルがどうしたとかいうような事を議論しながら上つて来る。池の小島の東屋に、三十ぐらいのめがねをかけた品のいい細君が、海軍服の男の子と小さい女の子を遊ばせている。海軍服は小石を拾って

は氷の上をすべらせて快い音を立てている。ベンチの上にはしわくちやの半紙が広げられて、その上にカステラの大きな切れがのっている。「あんな女の子がほしいわねえ」と妻がいつにない事を言う。

出口のほうへと崖の下をあるく。なんの見るものもない。後ろで妻が「おや、どんぐりが」と不意に大きな声をして、道わきの落ち葉の中へはいって行く。なるほど、落ち葉に交じって無数のどんぐりが、凍^いてた崖^{がけ}下の土にころがっている。妻はそこへしゃがんで熱心に拾いはじめる。見るまに左の手のひらにいっぱいになる。余も一つ二つ拾って向この便所の屋根へ投げると、カラカラところがって向こう側へ落ちる。妻は帯の間からハンケチを取り出して膝の上へ広げ、熱心に拾い集める。「もう大概にしないか、ばかだな」と言ってみたが、なかなかやめそうもないから便所へはいる。出て見るとまだ拾っている。「いったいそんなに拾って、どうしようと言うのだ」と聞くと、おもしろそうに笑いなगर、「だって拾うのがおもしろいじゃないですか」と言う。ハンケチにいっぱい拾って包んでだいじそうに縛っているから、もうよすかと思うと、今度は「あなたのハンケチも貸してちょうだい」と言う。とうとう余のハンケチにも何^{なん}合^{ごう}かのどんぐりを満たして「もうよしてよ、帰りましょう」とどこまでもいい気な事をいう。

どんぐりを拾つて喜んだ妻も今はない。お墓の土には苔の花がなんべんか咲いた。山にはどんぐりも落ちれば、鶉の鳴く音に落ち葉が降る。ことしの二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、この植物園へ遊びに来て、昔ながらのどんぐりを拾わせた。こんな些細な事にまで、遺伝というようなものがあるものだから、みつ坊は非常におもしろがった。五つ六つ拾うごとに、息をはずませて余のそばへ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。だんだん得物の増して行くのをのぞき込んで、頬を赤くしてうれしそうな溶けそうな顔をする。争われぬ母の面影がこの無邪気な顔のどこかのすみからチラリとのぞいて、うすれかかった昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きなどんぐり、こいもくくくくくみんな大きなどんぐり」と小さい泥だらけの指先で帽子の中に累々としたどんぐりの頭を一つ一つ突つつく。「大きいどんぐり、ちいちゃいどんぐり、みいんな利口などんぐりちゃん」と出たらめの唱歌のようなものを歌って飛び飛びしながらまた拾い始める。余はその罪のない横顔をじつと見入って、亡妻のあらゆる短所と長所、どんぐりのすきな事も折り鶴のじょうずな事も、なんにも遺伝してさしつかえはないが、始めと終わりの悲惨であつた母の運命だけは、この子に繰り返させたくないものだ、しみじみそう思つたのである。

(明治三十八年四月、ホトトギス)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：田中敬三

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どんぐり

寺田寅彦

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>